2022（令和４）年度事業報告

１．本年度の成果と到達点

本年度も引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のための対策を取りながら事業を実施した。以前のように、度重なる蔓延防止措置や緊急事態宣言の発令による事業そのものの実施困難という状況は脱したものの、外出時間の短縮等により、同行援護事業を中心にまだコロナ禍以前の状態には戻ることができていない状況にある。

しかし、そのような中にあっても、「独りぼっちの視覚障害者をなくす」という本会の理念を生かした活動を充実させるべく、役職員が一丸となり工夫を重ねながら取り組んだ。その結果、各部局や賛助団体の協力も得て、おおむね予定通り事業を遂行することができた。

以下、本年度当初に掲げた重点課題に対する取り組みを中心に、報告の概要を述べる。

（１）「独りぼっちの視覚障害者をなくそう」の理念を実現するための本会

づくり

各地域団体が工夫をこらしながら、会員の定期的な交流機会の創出に努力するとともに、市町村の協力が得られた地域においては、会員以外の視覚障害者にも情報が届くよう周知した上で、視覚障害者に役立つ情報提供や展示会などのイベントを開催した。

さらに「京都ロービジョンネットワーク」が行う研修会等の実施に協力し、まだ本会とつながりのない視覚障害者に少しでも情報が届くように努めた。

ウクライナ視覚障害者支援募金に取り組むとともに、「点字京都」紙面においても、現地の視覚障害者の現状について情報提供した。

（２）未来を見据えた組織づくりに向けての検討

　時代や社会環境の変化に対応した、役員の世代交代の円滑な実施に向けて、定時総会で定款を変更するとともに、組織再編に向けての議論を行った。

また、理事同士が話しやすくなったと好評を得た理事交流会を、本年度も互助部主催で実施したほか、３年ぶりとなる新年のつどいを開催した。

一方、課題となっている、地域団体の活性化については、なかなか特効薬が見出せない状況にある。そんな中においても、支援者や団体長が活動困難になっても、その地域で生活する会員の交流の場が確保されることを目指し、近隣地域の理事の協力を得て与謝支部の支援を行った。また、「点字京都」の紙面を活用し、各地域団体の取り組みや各部の動きを共有し、本会が一体となって活動できるよう工夫した。

視覚障害者福祉向上のためには、役職員が一丸となった本会運営が進められるような体制づくりが必要である。そこで、コロナ禍もあって実施できていなかった、役職員の交流機会の創出と相互理解の第一歩として、役職員交流会を開催した。

（３）それぞれの夢や希望を当事者団体としての運動に結び付けるための取り組み

個人や地域団体の声が本会の活動に反映され、その結果、要望が実現できるという取り組みはとても重要であるが、本年度も各地域別福祉大会は新型コロナのため実施できず、参加人数を絞った形で福祉懇談会等を開催した。個人や地域から日々寄せられる要望等については、生活環境改善部を中心として、面談などによる相談をはじめ、きめ細かな対応に努めた。

踏切への点字ブロック敷設の促進を目指し、会員が日常的に利用する踏切についての意見聴取を行ったほか、京都府が敷設を決定した踏切について、会員による現地立ち会い・点検を行った。その他、各市町村から寄せられる点字ブロックについての問い合わせに対応する等、交通安全への取り組みを推進した。

（４）制度拡充とそれぞれの自己実現を目指して

同行援護事業については、利用者のニーズ把握とよりスムーズな派遣を目指すシステムづくり、その他各種の課題に対応するため、役職員を中心としたプロジェクトチームの会議を定期的に開催した。また、自由に外出し、豊かな生活を送りたいという願いを、利用者・ガイドヘルパー・職員が共有していくことと、事業所に親しみを持っていただくために、愛称を募集し、「アイサポ」に決定した。

日常生活用具の相次ぐ値上げに伴い、地域団体と協力して、各市町村への基準額改善を求める要望活動を行った。実際にどれくらい値上げが行われているかを示すため、拡大読書器の価格表も作成し配布した。

情報・コミュニケーション支援の拡充は、デジタル化に伴う情報格差を是正する意味からも大変重要であるが、特に地域における担い手不足に課題を抱えている。そこで、iPhoneにより多くの人が親しむとともに、講師養成等にも資する取り組みとして、IT活用支援部が親鳥コース・ひよこコースという形で既存ユーザーと初心者に分けてサロンを開催した。南部アイセンターにおいても利用者同士が教え合う場として、iPhoneサロンの取り組みが開始された。

また、これらのサロンにおいては、学生ボランティアによる支援を得る試みを開始するとともに、アップルストアにも協力依頼を行うなど、外部からの協力を得る試みを実施した。

雇用・就労対策の分野では、職業部が続けてきた仕事サロンの開催が

１０周年を迎え記念事業を開催した。また、京都市や長岡京市で実施され視覚障害者も利用している、重度障害者等就労支援特別事業については、「点字京都」等を通じて会員への周知を図るとともに事例報告を含めた研修機会も持ち、この制度を必要とする会員の制度利用につなげることができた。

また、関連行政機関等との就労問題懇談会の対面開催を再開し、視覚障害者の就労への「チーム支援」に向けて課題の共有と連携の強化を図った。

（５）視覚障害の正しい理解と普及に向けた広範な府・市民への広報活動の充実

三療部では他の団体と共に、京都府と「災害時における あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の業務の提供に関する協定書」を締結した。

福祉やＩＴの利用につながっていない方にも情報を届ける取り組みとして、情報宣伝部が発行するメルマガ色鉛筆から生まれた書籍『見えない地球の暮らし方』第二巻の発行が決定し、準備を進めている。

これまで、視覚障害者の文化活動においては、特別に設定された催しに参加したり、本会自らがそのような機会を提供する必要があった。しかし、各種の広報活動の成果も相まって、美術館、ロームシアター京都をはじめ、映画や演劇など幅広い分野で、視覚障害者の入場を意識した取り組みが行われつつある。これらの取り組みにより、視覚障害者が何時でも楽しめる企画が充実してきたことは、最近の大きな特徴である。

長年続けてきた「あい・らぶ・ふぇあ」については、これまで以上に子ども連れの参加等が増えるよう検討を重ね、イオンモールKYOTOにおいて初めて開催した。

（６）「財政健全化計画」の立案と継続実施

コロナ禍において、同行援護事業をはじめとする収入減からまだ脱していない状況であり、コロナ以前と同水準になることは難しい状況にある。そんな中、コロナ収束後を見越した財政の健全化と安定的な運営に向けて、役職員を中心に議論を重ねている。

また、変化の激しい中にあっては、定期的に年度事業計画の進捗状況などを確認し、その後の活動に生かしていく体制づくりが求められることから、事業企画部を中心に、各種委託事業の進捗確認などをより詳細に実施した。